短篇小説　元述の出征[[1]](#footnote-1)

香山光郎

　時は新羅の文武王の十五年。百済、高句麗を打減して、新羅が三國統一を成遂げるといふ大業の元勲金庚信将軍の次男元述が太伯山の見性庵に隠れてから已に三年になる。

元述が、將軍暁天の裨將として、唐兵と石門に戰つたのは十九の年の八月であつた。唐の高宗は、新羅が、唐兵を追拂つて高句麗の故土を領有したのを怒つて、將高奉率、李謹行をして、兵四萬を率ゐて、平壌を圍ましめた。新羅の文武王は、将軍義福、春長等をしてこれを邀撃せしめたのであろが、将軍暁天、義文の部隊は、勇敢に唐軍に反撃を加へて、數千級の首を斬り、敗退の唐軍を石門まで追ひつめた。ところが。新羅軍中に、暁天部隊の功を嫉むものがあつて、軍令統一を缺き、友軍に裏切られて、孤立無援となり、敗退の已むなきに至つたが、暁天や義文は「陣に臨みて退かず」といふ新羅武士の訓を守つて勇躍敵陣中に跳び込み、花と散つたのである。後に殘つた元述は、裨將として、軍を率ゐる責任があるのであるが、瓦全を屑しとせず、暁天等の後を追ふべく、馬に跳び乗つた刹那、彼の副佐たる淡凌は、元述の馬の轡を取つて放さず、

「男児、死するが難しきにあらず、死に處することこそ難しけれ。死して成すなきは生きて後を圖るに若かじ」

と、軍を全うして退かむことを諌めた。元述は、

「男生を苟もせず。何の面目あつてか吾が父に見えむ」

と、いつて、馬に鞭を加へたが、淡凌は、いつかな轡を放さなかつたので、元述は、たうたう死期を失つてしまつた。

元述が都に歸るや、父庚信は怒つて、わが子にあらずとして對面を拒み、王に、元述に死賜はむことを願つたが、王は、「獨り裨將に重刑を施すべからず」といつて、元述を赦された。元述の母は、太宗の三女であるから、文武王とは、從兄弟の間柄である。

元述は、家にも入れず、田園に隱れて、ひたすら慚愧の月日を送つてゐたが、翌年父庚信が七十九の高齢で、薨ずるや、彼は家に歸つたが、母智炤夫人は、

「妾は卿に會ふことは相成りませぬ。婦人は三從の義ありと申しまする。妾今旣に寡なれば子に從ふべき[で]ありまする。なれども、元述は、旣に先君に子たるを得ざりし者なれば、妾は、その母となることは相成りませぬ」

といつて、對面を許さなかつた。元述は、せめて、父の靈前に哭き、母に一目會ふことを慟哭擗踊して、願つたが、ついに聽容れられなかつた。元述は、

「あゝ吾、淡凌に誤らされて此に至る」

と嘆じて、遂に太伯山に隱れたのである。

太伯山は見性菴。寺とはいふもの、わづかに風雨を凌げる位の粗未な建物だ。かつては、元暁大師が世を忍んでの佗住でもあつたところで、今は喜見といふ一人の老僧が、念佛三昧に日を送つてゐるととろだ。元暁といへば、元述の母の姉の瑶石公主の夫である。元述は、素性を隱して、喜見のために、薪を採り水を汲み、弟子とも寺男ともつかぬお勤をしてゐる。

正月の或日、元述は、朝まだき、見性菴から、本寺に通ずる道の雪を除けてゐた。老松の枝に積つた雪が、時々元述の屈めた背中に落ちて、かすかに音を立てる。目白が鳴く。元述は、手製の雪掻で右に左に、五六寸も積つた雪を掻き除ける。

時に誰かゞ、

「一寸、お尋申す」

と呼ばゝつたので、元述は腰を延ばした。彼の少年らしい美しい、顔はほてつたやうに紅かつた。元述一は一瞬ぎつくりした。數歩前に立つてゐるのは、粉れもな老忠僕須陀洹であつた。しかし元述は知らぬ振をよそ[お]つて、

　「何事でござる？」

と、いつて、須陀洹をまともに眺めた。

　「はても不思議なこと。その聲は聞きなれし元述さまのお聲」

　須陀洹は大きく眼を瞠つたが、變り果てたその姿は、元述のやうでもあり、ないやうでもあつた。頭を青い布切で眼深かに包み、身にはいとも汚れた襤褸を纏つてゐる。如何に世を忍ぶ姿とはいへ、太大角干様の御曹子元述様の成り果てとはどうしても思はれなかつた。

　須陀洹は二三歩元述に近寄りさま、

　「見性菴への道はこれでござるか」

と、元述の顔を覗き込む。

　「如何にも。かしこに見ゆるが見性菴でござる。」

　元述は、須陀洹の眼を避けるやうに、腰を屈めて、雪を掻き出した。

　「見性菴には、幾人の法師いますや。」

　須陀洹は、尚も元述に話しかける。

元述は、相變らず雪を掻きながら、

　「見性菴には、喜見和尚さま御一人にて、斯く申す拙者は、薪を取り水を汲み、雪降れば雪を掻く男でござる。」

と、そつけない返事をする。

　「失禮ながら今一言、お尋ね申さう。見性菴には、都より來ませる、元述さまと申上ぐる御方がゐらせられる筈、その元述さまは、居られまするか。」

「元述さまとや。はて、元述さまとや、聞き覺えのあるやうなる名なれど。」

元述は雪を掻いて、一歩一歩須陀洹から遠[ざ]かる。須陀洹は、いよいよ怪訝さうに元述の姿を見諦める。

　「聞き覺はあれども、御存知あらぬと申さるゝか。天が下、唐天竺まで知らぬものとてなき、太大角干庚信さまの御次男元述さまを、御存知あらぬとは申されますまいに。」

　元述は雪掻を杖にして、立ち上りながら、

　「あゝあの元述でござるか。石門の戰に、死に損つてをめをめ生き返つた、あの元述でござるか。あの名を口に[す]ることさへ穢らはしきあの元述でござるか。臨無退[[2]](#footnote-2)の戒を破り、君命に背き、家名を汚し、父にも母にも棄てられたる、あの元述ならば、あの名を想出すさへ、厭はしきあの元述ならば、神人共に忘れたはづ。足下許は、何故あつて、その元述を捜すのでござるか。恥知らずの彼めに恥を知らせようとでもいはるゝのか。」

元述は、興奮してゐる。

「いゝへ、滅相な。よしや元述さまが、神人に見棄てられようとも、見棄てられぬものが二人ござりまする。」

「二人とな。見棄てられぬとな。」

「さやうでござりまする。元述さまを見棄てることの出來ぬものが二人ござりまする。」

「その二人とは何者ぢや。世に物好きもあればあるもの。」

「その二人とはとお尋ねになりまするか。その二人とは、やつがれ申上げずとも、御承知のはづ。元述若様御出家この方。三歳が間、雨にも雪にも、元述さまの御後を慕ひ御跡を訪ねて、新羅中さまよひ廻りし、その二人、[も]しも、この世にてめぐり會へずば、冥途の果までも、元述さまの御後を追はず己まぬ、その二人を、よもや、元述さまが御存知あらせられぬとは仰せられまじと存じまする。」

須陀洹の聲は慄へ、眼からは涙が流れた。

「その二人」

元述は一人言のやうに呟いた。――

「さやう、その二人でござりまする。若様、その二人でござりまする。」

須陀洹は、いよいよ元述の前に歩み寄り、脆いた。彼は青布の巾を着け、同じ青布の衣を着てゐた。

元述は、感に堪へぬやうに、

「その二人。一人は、そこぢやが、今一人は誰ぢや。」

「阿佐姫さまにござりまする。」

「阿佐姫とな。聞覺えのある名前のやうぢやが。その阿佐姫とやらが如何致したといふのぢや。」

「若様。何を仰せられまする。百年の偕老を、いや、三生の緣を契りたまうた阿佐姫さまを、如何に何んでもお忘れなさりは致すまいに。若様。あゝ若様。」

須陀洹は、悲痛に堪えないやうに、兩手を胸に當てゝ揉つた。

「その阿佐姫とやらが。」

「はい、その阿佐姫さまが、今本山にお越しになつて居られまする。夫婦は一體、妻は夫に從ふ。苦にも樂にも、榮にも辱にも妻は夫に從ふも[の]にござる。地のはて、三途の磧の先までも、わが夫の跡に從ふと申されて、三歳が間、新羅の國の村といふ村、山といふ山を經廻りて、つひ昨日の夕暮、あの恐しき吹雪に咽ばれながら、浮石寺にお着きになりましてござりまする。寺の者より、この見性菴に、世の常ならぬまなざしの年若き御方ゐらせらるゝと申し上ぐれば、阿佐姫さまには、その御方に相違あるまい、観世音さまの御引合はせと、今朝夜明前より、それはそれは、傍の眼にも御痛はしきほどに、それでは、やつがれ、一走り致して、様子を見てまゐりますると、申上げて、かくは馳せ參じたる次第にござりまする。何と變りはてたまうた御姿。それとは、胸にぎつくり致しながらも、御見外れ申上ぐるほどの變り方。とはいへ、若様、まだあんよの時から、御近き申上げたやつがれ、この老いの眼の黒き中は、――あれあれ、かしこにお越しでござりまする。若様、あれあれ、かしこに、よろめきながら――阿佐姫さまにござりまする。後に續けるが、阿良、阿良が手捧げたるが、若様、元述さまの、御召物一襲。阿佐姫さまが、御手織、御手縫の若様の御召物。何とおんうるはしい、おん痛はしい――」

元述の眼も、今しがた崖道を斜に北方へ上つて來る二人の女の方へ走つた。しかし、元述は直ぐ、何事もなかつたやうに雪掻きを始めた。須陀洹が代らうといひはつたけれども、元述は許さなかつた。

元述は、太白山に隱れて以來、自ら天地に容れられない罪人として、此の世のすべての希望と共に樂しみをも棄てたのであつた。灰心滅智、元述はひたすら、世捨人の生に徹しようとしたのであつた。しかるに、思ひがけなくも、須陀洹があらはれ、また妻とは名ばかりの阿佐に訪れられたのである。阿佐とは、婚禮の日を數日の前に控へて、元述は出征の命を受けたのであつた。[阿佐]とは二三度、宮中その他で顔を合はせたことはあるが、親しくことばを交はしたことさへない。それにしても、將軍義春の娘阿佐といへば、新羅中知らぬ人もない美しい御姫だし、たとへ[束]の間の見合ひとはいへ、元述の魂に深く烙きつけられた俤ではある。さすがに、元述は胸騒ぎを抑へやうもなかつた。

須陀洹は、阿佐の方へ走つて行つた。

「見性菴にはどなたか居られましたか。」

阿佐は、息を切らしながら、須陀洹に尋ねた。阿佐はいたく疲れ、やつれてゐた。

「はい。あの御方にござりまする。かしこに、襤褸を纏ひ、青頭巾を冠りたるあの御方にござりまする。」

「あの御方。」

と、阿佐は、今までは氣がつかなかつたのだらう、腰を屈めて、雪を掻いてゐる元述の方に眼をやりながら、

「須陀洹。あの御方が、如何なされたといふのぢや。元述さまの隱家を御存じの御方とでもいはつしゃるのかいな。」

と、涙聲になつた。

　「いや、いや、姫さま、あの御方こそ、正しく元述若さまにござりまする。若さまを抱つこ申上げた、やつがれのこの眼さへも、最初は、御見外れ申上げたほどの御變方、さてもさても、御痛はしき限りにござりまする。なれども、あの青頭巾の下に輝くあの鳳の眼の如きおんまなざし、いさゝか上氣されたかに見受けられまする、あの美しき御頬、あの力のこもつた御聲など、三歳前に變りはござりませぬ。あゝ、太大角干さまの五人の若さまの中でも、一番美しく、勇しく、情深い元述さま。しかし、將來もござりまする。今に必らず、大功を御立て[に]なつて、御父上さまに劣らぬ御榮華の日も――」

　「元述さまは、この阿佐のことを御問ひになられましたかいな。」

　阿佐は須陀洹の述懷は、耳にも入らなかつたのであらう、須陀洹に皆までいはせず、涙ながらに聞くのであつた。

　「はい。いゝえ。若さまには、何事をも、都のことも、御宅さまのことも御聞きにはなりませぬ。たゞ深い物思ひに沈まれた御様子にござりまする。」

　「よもや、この阿佐を御忘れはなさらなかつたらうな」

と、阿佐は、しばし、元述の方を眺めてゐたが、

　「さあ、まゐりませう。一刻も早く、おんなつかしい元述さまのおん傍へまゐりませう。」

と、裳裾を片手で褰げて、すたすた、歩き出したかと思ふと、何かに驚いたやうに立ち止つた。

　「まつた、まつた。須陀洹よ。」

　「はい。」

　「阿佐の心は、元述さまのおん傍へおん傍へと逸れども、なれども、もしや、阿佐のために、阿佐が元述さまのおん傍に現れたゝめに、おん心を亂されるやうなことをがあつては、申譯なきこと。元述さまには、この世を果敢なみ、佛の逍に御精進なさるのでもあれば、佛道には魔物とか。阿佐がいとほしきわがの成道の邪魔をしたとあつては、――須陀洹、若さまヘ[今一度]走つて、阿佐がこゝに待命致して居りまする、おめもじ相叶はぬ事情もあらば、御遠慮申上げまする、といつて、元述さまの御許しを得て與れ。あ、まつたまつた、須陀洹、このお召物一襲、これは、阿佐が、手織手縫のもの、阿佐は御傍に御寄り申上げること叶はずとも、せめて、この一襲をばおん身に着けたまふやう。この山の中ではさぞ寒くもおはすことだらう。召上りものとて、かゝる山中に、しかも、この人跡稀なる山の奥にては、阿佐がおん傍について居れば、同じ山の草の葉、草の根でも、苦くないやうには調理しても進ぜむものを。須陀洹よ。つい愚痴をこぼした。そんなことを元述さまのおん耳に入れたくはござりませぬ。鐡石の大丈夫の心を女の愚痴もて亂しては、いや、須陀洹よ。たゞ、お目通叶ふか、それだけ承つて貰ひませうのう。して、このお召物と。では早う。」

　かういつて、須陀洹を、送り出すと、阿佐は、老木の蔭に身を隱してご袂で眼を拭いた。

　須陀洹が、阿佐の意を通ずると、元述は、しばらく考へ込んだが、

　「會はう。折角の御志、かたじけない。それにしても、いまだ婚禮も濟まさぬ間柄なれば、道傍でお會ひするのは禮に悖る。一足先に歸つて、賓主の禮にてお迎へするとしよう。さらば、須陀洹、かしこの見性菴まで阿佐姫を案内して貰はう。」

といつて、菴の方へ歩き出した。

　「ありがたうござりまする。かしこまりましてござりまする。」

須陀洹はわが事のやう喜びながら、阿佐の方へ戾つた。

　阿佐は、須陀洹が、衣類包を脇に抱へたまゝ戻つて來るのを見て、てつきり、すべて、斷られたものと思ひ、

「あゝ」といひざま、倒れかゝるところを、阿良に抱き止められた。

　「あれ、お姫さま。」

　阿良の叫聲が、靜かな山に、かすかに、ごだまして來る。須陀洹は、この有様を見て、仰天する。

　「お姫さま。元述若さまには、かたじけないと申されて、お姫さまを、道傍でお會するのは禮に悖る故、かしこの見性菴まで、お越あるやうにとのことでござりまする。お姫さま。あゝ。あんなに氣丈なことを申されても、やつぱり、女のかよわさ。お姫さま、お姫さま。」

　須陀洹がいくら呼んでも、阿佐は眠つた赤児のやうに首を垂れて、正氣に還らない。

　「この須陀洹が、お姫さまを抱へ申上げるとしよう。阿良殿はこのお召物を持たれい。」

　須陀洹は、眠れる子を抱き上げるやうに、阿佐を兩腕に擡げて歩き出した。

　「須陀洹も老いたわい」

須陀洹は、一歩一歩、躓かぬやう、轉ばぬやう、足で雪を掻き掻き、踏場を捜しつ、見性菴へと歩いて行く。曾つては、あばれる馬を手で抑へたほどの須陀洹も、阿佐を抱へての崖道に、息が切れた。しかし忠義一徹な須陀洹は、これも主君のおんための御奉公だと思ふと、役立つ老骨の光榮とありがたさに、斃れてもいゝと思つた。

　見性菴に運ばれて、元述の手厚い介抱を受けた阿佐が一食頃を過ぎてぱつちりと眼を開いた時には、自分の傍に元述が居るのを發見して、はつと驚くやうな表情と共に、止度なく涙が流れて、枕を濡らした。阿佐は跳ね起きて、元述の前に平伏しようとしたが、□された時のやうに身體がいふことを聞かなかつた。

　阿佐は、起き上るのをあきらめて、

　「元述さま」

と、呼んだ。その聲は打慄へてゐる。

　「阿佐姫」

　元述も、情のこもつた聲で呼び返した。

　「阿佐は嬉しうござりまする。」

「元述も黍う存じまする。」

「勿體なや。」

　阿佐は、感に堪へぬ如く眼を瞑り唇を嚙む。

　元述も瞑目して首垂れる。

　重い沈默である。たゞ、喜見老師の念佛の聲と、太鼓の音が聞えるが、それが返つて、靜寂を増すやうである。

　ものゝ小半時も經つたと思はれる頃、阿佐は眼を開いて、

　「元述さま」

と呼んだ。

　「おう。」

　「あなたさまは、これより、生涯佛門に帰依して、世を捨てたまふ、御所存にござりまするか。二度と、浮世のならひには――二度と家にお歸りはなさりませぬかいな。」

　阿佐のことばは哀願するやうに切であつた。元述も、阿佐のことばの意味を汲まないわけには行かない。それは、「この阿佐を如何なさります」と問詰められるのと、變りはなかつた。元述の胸は疼くやうであつた。

　「佛門に帰依まゐらす前に、この元述は、是非致さねばならないことが一つござりまする。それが濟まぬ中は佛門に帰依まゐらすとも、家に歸るとも、いづれとも申されませぬ。家と申しても、父上は他界したまひ、母上も出家して尼になりたまひたる今は、それがしの歸る家もござらぬ。」

　「その、是非なさらねばならない一つのことゝ仰せられまするのは。それは、この阿佐に話されてはならないことでゝも。」

「いやいや。さやうなことはござらぬ。阿佐殿にも御承知願はねばならぬことでござる。」

「と申しますると。」

「それは他でもござらぬ。元述は、石門の戰にて、死すべくして、死[に]遲れし者、いつかは、戰に出て死なねばならぬものでござる。武運拙き元述には、中々にその機會も廻り來りませぬ。よくよく不運なる者にござる。百濟、高句麗己に滅び、唐も散々わが新羅に打ちのめされて、今は、われを犯す氣力も盡きたと見えまする。天下泰平、誠に同慶の極みにござりまする。されば、この元述は汚名を雪がぬまゝ、あの世へ行くかと思ほへて、石門にて淡浚に止められたるわが意氣地なさが、かへすがへすも口惜しうござる。されば今は、この身は、わが身にて、わが身ならぬ身、三世を契りし阿佐殿に、會ひながらも、夫とも名乗れず――母上御存[命]中にも、子とも名乗れず、天地にも容れられず、神人に棄てられたるこの身にござるごる。」

「勿體なうござる。元述さま、勿體[なう]ござりまする。阿佐奴、この場に死んでも、思ひ殘すことはござりまぬ。それほどまでに、あなたさまに思はれて――あゝ、阿佐奴は果報者にござりまする。南無觀世音菩薩。佛恩ありがたや。」

　阿佐、首を上げて、合掌する。合掌が終ると、阿佐は、無理に上半身を起して起き直る。急に元氣が出たやうだ。

　「元述さま。戰に出られまするか。それならば。阿佐が挿良の城下を通りまする時、大勢の人々、官衙の前に集り居ります故、何事かと、問はせますれば、今唐軍が買蘇川城より遠からぬところまで攻寄せたる由にて、募兵の貼出しを見て居るとか――」

　「唐兵が？」

　「あい。唐兵が買蘇川城へ。」

　「して、その將は誰か、噂はござらなんだか。」

　「あい。その將は李謹行と聞きしやうに存じまする」

　「李謹行。たしかに李謹行でござるか。」

　「あい。たしかに、李謹行。」

「あゝ。石門の戦の敵將李謹行か。何と、これは天の配劑。元述必らず宿敵李謹行の首を得て。暁天、義文両將軍の仇を討ち、石門の戰に死に後れたる恥を雪がむ。阿佐殿。おんみは、元述のよき妻にござる。ようこそこの知らせを齎らせたまうた。ようこそ、この山奥[で]眠りかけたる、元述が心を醒まし[て]下された。あゝ、天われを棄てたまはず。さらば、阿佐殿、敵は買蘇川城に迫まりたれば、元述、一[刻]も猶豫は罷りなりませぬ。さらば」と、元述立ち上る。

「元述さま。せめて、今宵一宵だけでも語らうて、阿佐が作りたる飯の一膳でも召上つて。」

阿佐は、手を延ばして、元述に縋る。

「これは、また、何と淺間しきこといはつしやる。新羅武士の妻らしくもない。阿佐殿のまごころこめてつくりたまうた一襲、あれだけは、死出の装束と致しませうぞ。さらば。」

元述は麻靴の紐を結ぶ。

「元述さま。何卒、お許し下され。阿佐奴の淺墓さ。ひとへに御許し下され。阿佐は、こゝに、見性菴に賤りて、あなたさまの、武運長久を祈りませう。立派に花郎の妻らしく生き、元述さまの妻らしく死にませう[ぞ]。元述さま、さらば、さらば。須陀洹よ、阿良や、若様の御出征ぢや。」

いひも果てず、阿佐は床の上に打倒れる。その時には元述は、もう、崖を驅け降りてゐた。（終）

註。三國史記に據れば、元述はついに李謹行の軍を破り大功を立てたが、石門の罪を深く恥ぢて、ついに官途に就かず田園に一生を終へた。その妻のことについては歴史には何も傅はつてゐない。

1. 『新時代』1944年6月　 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「臨戰無退」（戦に望んで退かず）の誤りと思われる。 [↑](#footnote-ref-2)